

## 韓半島沿海捕鯨と資料の問題〔2〕

森 田 勝 昭

### は じ め に

数百年の歴史的な深度で展開されたと考えられるいわゆる「朝鮮通漁」は、19世紀後半からの日本・ロシアをはじめとする勢力による韓半島植民地化の過程で、個人レベルから、企業法人、地方政府、中央政府までを巻き込む「近代的」植民地政治経済運動へと発展した。「朝鮮通漁」は、日韓の自然環境や文化的距離の近さを前提に始まり、やがては経済システムや政治システムを巻き込みつつ植民地的メカニズムを整えていった。筆者は、「朝鮮通漁」が日韓の過去や現在の経済的、社会的、文化的あるいは政治的な関係を検討するさい、極めて重要な要素であり、植民地主義の研究に寄与する多くの可能性を秘めた分野であると認識している。しかし、その研究は決して盛んというわけではなく、とりわけ日本側の研究は極めて不満足なものといわざるをえない。

19世紀末から15年戦争終結まで韓半島の東海岸域を中心に経営された近代的大型捕鯨は、「朝鮮通漁」の一翼を担っていた。しかし、その一方で大型捕鯨は極めて特殊な技術と大きな資本力を要する「漁業」であり、その経済・社会的構造、操業形態、韓国社会との関係など、零細漁民中心の「朝鮮通漁」と異なる特徴も持つ。しかしそれは「朝鮮通漁」という歴史的コンテクストのなかで例外というよりむしろ、「朝鮮通漁」のもつある種の特徴が強調され特化されたものと筆者は考えている。

韓半島沿海捕鯨と資料の問題〔1〕でも述べたとおり、日本沿岸では19世紀後半、従来のいわゆる「古式捕鯨」の構造疲労、巨大組織を統合する社会

・文化的システムの制度疲労、さらにおそらくは鯨類資源減少や気象変動などのファクターが複合され、慢性的な不況に陥っていた。明治期に日本沿岸域の海洋哺乳類資源利用を一貫して報じてきた唯一の水産業界誌『大日本水産會報（告）』の各種調査報告は、現在捕鯨を地域アイデンティティのシンボルとして使用する地域の捕鯨が、慢性的な不漁に苦しんでいたことを示している。この苦境に対して、1870年代頃から鯨類をふくむ新たな海洋哺乳類資源利用技術の開発と漁場開発が始まる。

この動きは当初、個人的で散発的な試みに過ぎなかったが、やがて官民を巻き込んだ産業運動へと展開され、半官半民の漁業団体である「大日本水産会」、地方政府の水産関係部局、政府水産関係省庁が種々の試みを実行していく。その一つ、そしてもっとも「成功」を治めたものに「朝鮮通漁」の動きに乗って新たな漁場を韓半島沿海域にもとめる動きがあった。ただ、「韓半島沿海捕鯨と資料の問題〔1〕」でも述べたとおり、この動きに関する研究は多くの課題を残したままであり、一連の動きの具体的「事実関係」ですら未解明の点が多い。今まで、日本における捕鯨史研究は韓半島沿海捕鯨のテーマをほとんど対象として扱えなかった。とはいえ、韓半島沿海域の捕鯨活動に関して基本的な記録や先行研究がいくつかある。

当時最大の捕鯨会社だった東洋捕鯨株式会社社史の『本邦の諾威式捕鯨誌』（1910）、『大日本水産會報』に収録された記事や作家江見水蔭『実録捕鯨船』のようなドキュメンタリーは記録としても重要だ。またアメリカ自然誌博物館学芸員で、20世紀初頭の日本列島及び韓半島の捕鯨基地を訪問し、捕鯨産業の現場を映像資料とともに記録した Roy Chapman Andrews の *Whale Hunting with Gun and Camera*（1916）などの検討も必要となる。ちなみに、ここには、紀伊大島や宮城県鮎川、韓国慶尚南道蔚山などに水揚げされる鯨類の資料（とりわけ Korean Gray Whale と呼ばれるコク鯨アジア系群）と捕鯨活動が写真とともに記録されている。これ以外にも相当数の記録ドキュメントがあり、すでに「韓半島沿海捕鯨と資料の問題〔1〕」で捕鯨関連日本側資料として4グループに分類しておいた。また研究書としては、例

えば、1979年に石田好数が『日本漁民史』で、日本の捕鯨勢力が韓半島東海岸域へ進出する過程を、植民地化プロセスという大きなコンテクストと零細漁民と巨大漁業資本の対立を軸に描き出したことがあった(石田, 1979)。近年は、鳥巢京一が九州地方の捕鯨関連資料を発掘し、ロシアによるノルウェー式捕鯨や韓半島沿海域へ進出する日本の捕鯨会社の記述に着手している[鳥巢, 1994, 1999]。ただ研究の数自体まだ少なく、また日本語資料の批判的利用というプロセスが不十分なうえ、韓国側資料利用にいたってはほとんど進んでいないというのが実情である。

「韓半島沿海捕鯨と資料の問題〔1〕」では、韓国語資料という視点を導入する手始めに、釜山水産大学校の박구영教授による『韓半島沿海捕鯨史』(1995)で言及される韓国語資料とこの韓国研究者による捕鯨史の一端を紹介した。ここでもこの作業を引き続き行なう。

## 1. Keizerling の捕鯨活動 (2) : 捕鯨特許契約

1894年から1898年まで Keizerling の捕鯨活動は、正式の捕鯨特許契約を締結しないままいわば「違法」に行われていた。박はその間、Keizerling 捕鯨船団が次第に成績をあげていったこと、また鯨体解剖のため不法に各地の港に侵入したこと、それに対して韓国政府が抗議を繰り返していたことを報告している。박はこの期間を Keizerling 捕鯨の「前期」とし、捕鯨基地租借捕鯨条約締結、事業の株式会社化、母船式技術導入、日露戦争による打撃、廃業にいたる 1899年～1912年までを「後期」とする。後期に関する記録ははるかに多く、韓国語資料も増加している。さて、「後期」の Keizerling 捕鯨を見てゆこう。

ロシアによる捕鯨特許契約締結にむけた「力」による交渉の過程を、박は主として韓国政府資料、韓国語新聞、日本政府外交資料を利用して再構成している。韓国側の資料としてはロシアの強硬な要求に対応する韓国政府の記録「各部請議書存案」, 「俄案」, その経緯を伝えるジャーナリズム「독립신

是」(独立新聞),「皇城新聞」,日本語としては交渉の経緯を外交活動レベルで伝える「中韓日本公使館記録」などがある。

1899年,ロシア捕鯨船の鎮浦不法入港問題が持ち上がっている頃,ロシアは「合法的」捕鯨を実現するために,韓国政府に捕鯨特許契約(租借地問題の解決が含まれる)の承認を迫っている。このプロセスは簡単なものではなく,박 구병は「皇城新聞」の記事を引用して,この要求に対しては韓国政府内で極めて強い反対意見があったことを明らかにしている。しかし結局は,12ヶ年を期限に12箇条の捕鯨特許契約が成立することになる。契約文書は漢文,露文,英文で作成され,박 구병はそのうち「駐韓日本公使館記録」に残された英文契約書の写しを確認している。契約の主な内容は,①捕鯨基地の設置場所,②民有地の占有問題,③基地施設,④労働者雇用問題,⑤特許期間,⑥基地使用料,⑦特許の譲渡,⑧税官吏派遣問題,⑨密輸防止,⑩税金及び罰則となっている。これで Keizerling にとって,韓国で捕獲及び解剖が「正式」に可能になった。

## 2. Keizerling の捕鯨活動 (3): 株式会社としての 再出発と船団の構成

Keizerling の太平洋捕鯨会社は捕鯨特許契約を締結後,事業の拡大を目指して株式会社組織へと改編される。박 구병は Ernst Weberman (Weberman 1914) に拠りながら,株式会社の設立目的,業務内容,資本金規模などを略述する。「韓半島沿海捕鯨と資料の問題 (1)」でも述べたとおり,ロシア本国での動きに関しては,ほとんどがロシア人研究者 Ernst Weberman (박 구병は Weberman と表記) とノルウエー人捕鯨史研究者の J. N. Tønnessen と A. O. Johnsen の記述によっている。それによれば,新しい株式会社はオホーツク海,ベーリング海,東海(日本海)一帯で捕鯨をはじめとする各種漁業および水産加工業を目的としていた。資本金は150万ルーブルだった。

Keizerling 捕鯨船団は徐々に成長し船数を増やしてゆく。박 구병は Ernst

Weberman の論文から 1900 年の船団の組織と乗組員の実態を再構成している。帛の記述を翻訳しておく。

ゲオルギ号とニコライ号は捕鯨船として Keizerling が事業に着手して以来使用してきたものだ。この双子の捕鯨船は立派な造りの汽船であり、その装飾は華麗なまでだったといわれる。船室には近代捕鯨の創始者スヴン・フォインと皇帝の肖像が飾られていた。

ゲオルギ号の乗組員は 13 名だった。船長チジェルマンはロシア人で月給 200 ルーブルを支給されていた。砲手はノルエー人 H. G. メルソンで、月給 125 ルーブル、さらに鯨 1 頭につき 20 ルーブルのボーナスがついた。ロシア人機関士 2 名はそれぞれ月給 85 ルーブル、鯨 1 頭当たり 15 ルーブルのボーナスを受けた。その他の乗組員は、50 ルーブルの月給と 1 頭当たり 5 ルーブルを支給される甲板長、95 ルーブルの月給と 1 頭当たり 18 ルーブルのボーナスを 4 等分する 4 名の水夫、2 名の火夫、25 ルーブルと 6 ルーブルでそれぞれ 50 カペイカのボーナスを受ける調理員とボーイで構成されていた。賃金支払形態としては船長をのぞき、固定給に出来高払いの歩合給を付加した混合歩合制をとった。地位の高い乗務員は砲手 1 名をのぞきすべてロシア人であり、主にバルト海出身だった。それ以外の乗組員は外国人であり、韓国人 5 名、中国人 2 名だった。韓国人はその名前が（ロシア風に）、ホンウスニ、ミシカ、マンバニ、火夫チムスナグ、ヤンプンギとなっている。この中の 2 名の名前は、ホン・ウソン、キム・スナックだったらしい。

ニコライ号にも船長を含めて 13 名の乗組員がいた。船長はノルウエー人 C. アムンゼンで、後にロシア人キップシと交替する。アムンゼンは砲手となった。ニコライ号にも中国人 2 名と韓国人 6 名が乗っていた。船員 4 名、火夫 1 名、ボーイ 1 名でゲオルギ号と同様であり、すべて下級船員だった。賃金支払法はゲオルギ号と殆ど同じである。

アレクサンドル号は輸送船だった。乗務員は 200 ルーブルの月給を受

けるロシア人船長のレベルドビッチ、それぞれ 10 ルーブルと 50 ルーブルの月給のロシア人副船長、月給 125 ルーブルと 100 ルーブルのドイツ人機関士、これ以外は月給の少ない大工 1 名、水夫 1 名、火夫 2 名（以上すべてロシア人）と、中国人料理人 1 名である。

シビリ号は汽帆の輸送船だった。同船は 1900 年に船長含めて 39 名の乗組みだった。船長と航海士は、それぞれ 150 ルーブルと 100 ルーブルの月給を支給され、それ以外に 1 頭当たり少額のボーナスもあった。2 名の機関士の月給は 60 ルーブルと 25 ルーブルで、それ以外の乗組員は甲板長 1 名、水夫 4 名、鍛冶工 1 名、料理人、大工、火夫各 1 名、解剖要員 20 名、塩蔵職人 5 名である。韓国人の機関士 1 名（月給 25 ルーブル）と水夫 3 名も乗組んでいた。解剖要員は全て中国人、塩蔵職人は全て日本人だった。

以上が船団の中心をなす船舶だが、これ以外にヨット・ニコライ号、レスニック号、大洋丸、コルリジャ号、カメラン号、ベラ号、大福丸、蛭子丸などがあった。ヨット・ニコライ号はオットセイ密猟中に拿捕され株式会社に残ったもので船長は日本人だった。レスニック号は輸送船としてレンタルしていた。1900 年には乗組員 7 名だったが、船長のロシア人をのぞき残りは全て韓国人だった。コルリジャ号は 1900 年に 973 ルーブル 50 カペイカで購入した船で、乗組員は 1900 年当時ロシア人船長と日本人甲板長だけだった。

1900 年当時の船団は、2 隻の捕鯨船（キャッチャーボート）と大型輸送船 2 隻、その他小型の輸送・運搬船 5 から 7 隻という構成だった。輸送船のうち 1 隻は、解剖要員 20 名（中国人）と塩蔵職人 5 名（日本人）が乗組んでいる。日本人塩蔵職人は解剖と解剖後の鯨肉部位の種分けおよび加工、そして、主として日本向けの食肉用鯨肉の塩蔵作業を行なった。

韓国釜山朝鮮漁業協会が『大日本水産會報』第 212 号によせた「韓海捕鯨之一斑」（1900）も同じ時期のロシア捕鯨船団の実態を報告している。ただ

し<sup>4</sup> 子<sup>5</sup>男はこの記事に言及していない。固有名などをそのまま表記することにして、その報告をまとめると次のようになる。

ニコライ号（捕鯨船，汽船，49トン）13名乗組み

船長：カクテン，砲手兼運転手：ノルウエー人（1名）

機関士：ロシア人（1名）

水夫，火夫：韓国人（8名）

料理人，ボーイ：中国人（2名）

ギオルギ号（捕鯨船，汽船，49トン）13名乗組み

船長：シリワリ，ロシア人，砲手兼運転手：ノルウエー人（1名）

機関士：ロシア人（1名）

水夫，火夫：韓国人（8名）

料理人，ボーイ：中国人（2名）

シベリ号（タイ解船，汽帆船，250トン）15名乗組み

船長：イワノフ，ロシア人

機関士：ロシア人（1名）

運転手：ロシア人（1名）

解剖要員：ロシア人（1名）

水夫，火夫：韓国人（4名）

料理人，ボーイ：中国人（2名）

塩蔵手：日本人（5名）

大洋丸（タイ解船，帆船，130トン）7名乗組み

（長崎キヘイ会社よりチャーター）

船長：吉田増太郎，日本人

その他日本人（6名）

實効丸（運搬船，汽船，500トン）19名乗組み

（函館野田某よりチャーター）

船長：近松利吉，日本人

その他：日本人（18名）

ゴーリッツ（運搬船，帆船，200 トン）8 名乗組み

船長：カセノベスキー，ロシア人

運転手：日本人（1 名）

その他：韓国人（6 名）

レミックス（運搬船，帆船，200 トン）8 名乗組み

船長：コーシュ，ロシア人

その他：？（7 名）

カメラン（役員搭乗船，帆船，45 トン）乗組員数未定（現在 26 名）

船長：（欠）

支配人代理：クゴー，ゲーセルリング

元山海關出張員：陸奥小次郎，日本人

人足頭：ロシア人（1 名）

鍛冶屋：ロシア人（1 名）

水夫，料理人：日本人（2 名）

切解夫：中国人（20 名）

合計 109 名

このように，박 구병が Ernst Weberman の論文によって再構成した船団と，韓国釜山朝鮮漁業協会が『大日本水産會報』第 212 号によせた「韓海捕鯨之一斑」という報告とでは，船団を構成する船数，船長などの固有名，民族性からみた構成比率で若干の食い違いが見られる。おそらくは韓国釜山朝鮮漁業協会が入手した資料とその理解に問題があったことが推測されるが，問題は違いというよりむしろ，この二つの資料が指し示す共通点にあるといえる。詳しくは後述するが，Kejzerling 捕鯨船団の特徴として次の点を指摘しておこう。

まず技術的な点では，シビリ号が一種の「母船」の役割を果たしている点である。ロシアは既に述べたように，不法に韓国の港へ強行入港しそこで鯨体解剖や鯨肉処理を行なうことが問題となっていた。捕鯨特許契約はこの操業を合法化するものだったが，この時期の船団は海上での鯨体処理と製品化

という方式、つまりいわゆる「母船式」への過渡的な形態を示している。また、船団では追尾、捕獲、解剖処理、輸送、物資供給といった捕鯨活動の分業化が進んでいることも特徴である。第2の特徴として、船団構成の多国籍性、というよりむしろ多民族性があげられる。実は筆者の関心の中心はこの点にある。つまり、朝鮮通漁、大型沿岸捕鯨、多民族性、植民地をキーワードとして、東アジアの現代社会を分析にまで至ることが、一連の研究の目的の一つである。

### 3. Kejzerling の捕鯨活動 (4) :

#### ロシア捕鯨船団の「多民族性」とエスノネットワーク

박 구병は Ernst Weberman の論文によりながら 1900 年のロシア捕鯨船団の構成解説に続いて、日本側資料に目を転じ、『大日本水産會報』第 232 号の記事「朝鮮海通漁組合聯号調査：朝鮮捕鯨業」および東洋捕鯨株式会社史の『本邦の諾威式捕鯨誌』から、その翌年 1901 年の船団を再構成する。『大日本水産會報』第 235 の記事によれば、その船団は次のようになる。

捕 鯨 船	捕 鯨 船	解 剖 船	解 剖 船	貯 蔵 船	運 搬 船	供 給 船
ニコライ	ゲオルギ	ゴーリッツ	レシニック	ベラ	アレクサンドル	カマラン
ロシア汽船 登録46トン 乗組員 13	ロシア汽船 登録49トン 乗組員 13	ロシア帆船 登録60トン 乗組員 29	ロシア帆船 登録87トン 乗組員 9	ロシア帆船 登録144トン 乗組員 8	ロシア汽船 登録57トン 乗組員未詳	ロシア帆船 登録45トン 乗組員未詳
船長 (ロ) 砲手 (ノ) 機関士 (ロ) 水火夫 (韓) ⑧ ボーイ (中)	船長 (ロ) 砲手 (ノ) 機関士 (ロ) 水火夫 (韓) ⑧ ボーイ (中)	船長 (ロ) 運転手 (ロ) 解剖係 (ロ) 解剖夫 (中) ②⑩ その他 (韓 ロ中) ⑥	船長 (日) 運転手 (日) その他 (韓 ロ) 元山海関官 吏 (日)	船長 (ロ) 運転手 (ロ) その他 (韓 ロ) ⑥	船長 (ロ) 機関士 (ロ) 運転手 (ロ) その他 (韓 中) 数名	船長 (ロ) 運転手 (ロ) その他 (韓 中) 数名

\* (ロ)：ロシア人, (ノ)：ノルウェー人, (韓)：韓国人, (中)：中国人, (日)：日本人。

\*⑩内の数字は人数を示す。記載がないのは1名。

『大日本水産會報』第 235 号の記事「朝鮮海通漁組合聯号調査：朝鮮捕鯨業」は前年使用されていたシベリ号が座礁沈没したこと、日本からのチャーター船、大洋丸と實効丸は解雇されたことを記している。このように、박 子堦の調査や『大日本水産會報』をはじめとする日本語資料は、当時の Kejzerling 捕鯨船団が多民族の構成をとっていたことを示している、船団の民族構成と職種あるいは職階はおおよそ次のようになる。

- ① 船団の上層部を構成するロシア人グループ。
- ② 捕鯨技術を提供するノルウエー人グループ。
- ③ 主に操船の単純労働部分を担当する韓国人グループ。
- ④ 鯨体の部位解体という単純作業や船の雑用係ボーイの中国人グループ。
- ⑤ 輸送船団と日本向け鯨肉製品加工を担う日本人グループ。

捕鯨船団では①と②のグループが上層部を形成し、待遇面でも他を圧倒している。

まず①のロシア人グループは主としてバルト海地方出身者で占められていた。また汽船の場合、機関士もロシア人グループが担当した。ただし、東アジア海域での捕鯨技術提供、また鯨肉の市場としての日本という固有の事情から、輸送船の上層部に日本人グループが入り込むことがあった。表中のレスニック号は『大日本水産會報』第 235 号によれば「解剖船」だが、船の大きさや人員配備からみて、輸送船という可能性も高い。

②のノルウエー人グループは、現代捕鯨の基本的技術となるいわゆるノルウエー式捕鯨技術を伝えるプロフェッショナル・グループである。ノルウエー式捕鯨技術開発当初はノルウエー北部フィンマルク地方の沿岸域でのみ採用されていたが、その圧倒的な効率と鯨油に対する需要の伸びから、急速に各地へ伝播している (Tønnessen, 1982)。その際、新技術を担って移動したのがノルウエー人砲手たちで、北海海域はもちろん、北米北方海域や東アジ

ア海域、20世紀に入ると南氷洋まで活動範囲を広げていった。20世紀初頭に日本で本格化する大型捕鯨でも、捕獲技術はノルウエー人砲手が担った。1910年代の日本の捕鯨会社では、90%近くがノルウエー人砲手で占められていた(Tønnessen, 1982)。日本人がノルウエー人技術者に完全にとってかわるのは1930年代を待たなければならない。探鯨、追尾、発砲、捕獲の一連の活動を円滑に実行するため、ノルウエー人砲手が運転手を兼ねることも多かった。

③の韓国人グループに関してはほとんど何も明らかにされていないが、このロシア船団の場合、操船にかかわる単純労働を韓国人グループが担ったらしい。筆者はこのグループに大きな関心を持っているが、資料的な困難が大きく、作業は遅々として進まないのが実状である。박 子甕もこのグループに関しては、『大日本水産會報』をはじめとする日本語以外の資料を使っていない。ただ、ロシア捕鯨やロシアの後を追って資源争奪競争に加わった日本捕鯨、あるいは朝鮮通漁の現場では、韓半島の極めて重要な「文化接触環境」(コンタクトゾーン)が形成されていたことは間違いない。朝鮮通漁を媒介とした「コンタクトゾーン」研究自体これからの分野であり、日本研究者によるものはほとんどない。韓国の先駆的な研究としては최길성等のグループによる「巨文島」研究がある(최, 1990)。筆者の今後の研究の大きなテーマの一つである捕鯨に関与した韓国人情報をもうすこしだけ日本語資料に見ておこう。

ロシア捕鯨と前後して韓半島の鯨類資源を独占することになる東洋捕鯨株式会社の捕鯨船では、船長、機関長、砲手などをノルウエー人が担っていたが、一般船員として韓国人、そのリーダーとして日本語と英語を話すやはり韓国人の水夫長、ボーイとしてノルウエー人少年という構成を取る船があった(江見, 1907)。もちろん日本人船長の捕鯨船もあったが、砲手はノルウエー人であり、単純労働を韓半島出身者が担ったようである。解剖、製品調製、保存などを行う陸上の解剖場では解剖手として40~50名の日本人とともに、運搬など重労働を担う韓国人グループとそのリーダーの韓国人が配置

された。さらに例えば通訳のように、会社と地域社会とを結ぶ韓国人もいた。

④の中国人グループは 19 世紀から 20 世紀にかけて、東アジア海域の海洋活動にしばしば登場する。その役割は海洋活動のいわば最下層を担う単純労働者である場合が多い。例えば、19 世紀後半、横浜をベースに千島列島やカムチャッカ半島などオホーツク海域でラッコおよびオットセイ猟業を営んだイギリス人 H. J. Snow は、一貫してアジア系の船員を単純労働用にリクルートしてる。H. J. Snow は当初、単純労働者として横浜や函館で日本人をリクルートした。やがて、外国船で働く日本人問題が政治問題としてクロージアアップされ、1880 年代に法的規制が実施されると、H. J. Snow はその対抗措置として上海で中国人をリクルートしている (Snow, 1910)。

⑤の日本人グループは、地理的な条件から容易に日本船籍の船をチャーターできること、また日本市場へ運ぶさい好都合であるという理由からロシア捕鯨の一翼を担うことになった。また、日本には鯨肉市場が存在し世界でも有数の鯨肉消費地が控えていたので、日本向けの鯨肉製品を製造する特殊技術（塩蔵技術）を提供する日本人グループが不可欠だった。1903 年、世界初の捕鯨母船ミハイル号がロシア船団に加わったとき、ヨーロッパ人 30 名、中国人 50 名、韓国人 10 数名、日本人 10 数名という編成が記録されている（『大日本水産會報』260, 1904）。

東アジア海域の〈非アジア系〉勢力による海洋活動では、実はこうした日本人船員がリクルートされるのは特殊な例ではない。1880 年代の北米を母港とするオットセイ猟船には、相当数の日本人が乗組んでいた記録がある。彼らは横浜や函館あるいは北米各地の港でリクルートされた。オットセイ猟船の場合、密猟容疑で拿捕した結果、船長以外全員が日本人だったという例も報告されている（森田，1998）。中には日本人と船上層部との間にたって、両者の関係を調整する役割を担うものも出てきた。彼らは明確にプロ集団であり、船員社会や船社会で独特の地位を保持していた。なかには船の中で特別なステータスを獲得し、全ての社会集団が親愛や尊敬の念で接していた例

も報告されている (Snow, 1910)。たとえばレスニック号の船長は「吉田増太郎」という人物で、1900 年の段階では傭船「大洋丸」の船長として記録されているが、大洋丸解雇の後もロシア捕鯨船団に残り船長として活動を続けた。

#### 4. Keizerling の捕鯨活動 (5) : 操業実態と資料

박 구병は Keizerling 捕鯨船団の操業実態を解明するさい、ロシア語資料の Ernst Weberman 論文、韓国語新聞、および日本語資料を使っている。日本語資料としては『大日本水産會報』、外務省の『通商彙纂』など公的報告書、岡庸一『最新韓國事情』のような日本人の手になる韓国研究書が中心になる。『最新韓國事情』は韓半島植民地化のプロセスの一翼を担った「韓国研究」に関する出版物中でも重要なもののひとつであり、従来の政治的プロパガンダをはなれ、貿易・通商をめぐる経済的議論へ大きく踏み込んでいる。こうした資料から박 구병は Keizerling 捕鯨船団の、操業実績 (捕獲頭数)、合法的に租借した「馬養島」, 「長箭」, 「長生浦」3 個所の基地の地理、面積、設備、使用時期などの情報をまとめ、さらに鯨体の処理、製品の種類、市場と価格にも言及する。박 구병がもっとも頻繁に参照するのは『大日本水産會報』だが、最後にここで 1900 年から Keizerling の捕鯨会社が解散する 1912 年まで『大日本水産會報』に取上げられたロシア捕鯨関連記事をまとめておこう。

- ・ 第 212 号「韓海捕鯨之一斑」(韓国釜山朝鮮漁業協會, 1899)
- ・ 第 213 号「朝鮮海水産業の實況」(朝鮮漁業協會, 1899)
- ・ 第 218 号「三十二年下半季漁業情況報告」(朝鮮漁業協會, 1899)
- ・ 第 222 号「諾威式捕鯨法一斑」(松牧三郎, 1899)
- ・ 第 226 号「諾威式捕鯨實驗談」(松牧三郎, 1901)
- ・ 第 227 号「諾威式捕鯨實驗談」(松牧三郎, 1901)

- ・ 第 228 号「諾威式捕鯨實驗談」(松牧三郎, 1901)
- ・ 第 229 号「諾威式捕鯨實驗談」(松牧三郎, 1901)
- ・ 第 230 号「諾威式捕鯨實驗談」(松牧三郎, 1901)
- ・ 第 234 号「朝鮮捕鯨業」(朝鮮海通漁組合聯号會調査, 1902)
- ・ 第 235 号「朝鮮捕鯨業」(朝鮮海通漁組合聯号會調査, 1902)
- ・ 第 260 号「日露両国人の韓海捕鯨状況」(1904)
- ・ 第 272 号「韓海捕鯨業の状況」(1905)
- ・ 第 287 号「韓海捕鯨業の近況」(1906)

以上、主として박 구병の研究にそって、ロシアによる韓半島沿岸捕鯨活動に関する資料の問題を検討してきた。Kejzerling の捕鯨業が株式会社組織へ移行したころ、長期間の調査と試行錯誤をへて、日本の漁業資本による韓半島捕鯨が始まっている。次回は、そこにいたるまでの経緯とノルウエー式を採用し韓半島へ進出して行く日本の捕鯨産業をめぐる資料を検討する。

#### 参考資料

##### 日本語文献：

- 石田好数 1979『日本漁民史』三一書房
- 江見水蔭 1907『実地探險捕鯨船』博文館
- 岡 庸一 1903『最新韓國事情』高山堂
- 外務省通商局 1894『朝鮮近海漁業視察概況』
- 下啓介, 山脇宗次 1905『韓國水産調査報告』農商務省
- 大日本水産會 1882~1893『大日本水産會報(告)』第1~235号
- 韓海捕鯨之一斑(韓國釜山朝鮮漁業協會, 1899, 212)
- 朝鮮海水産業の實況(朝鮮漁業協會, 1899, 213)
- 三十二年下半季漁業情況報告(朝鮮漁業協會, 1899, 218)
- 諾威式捕鯨法一斑(松牧三郎, 1899, 222)
- 諾威式捕鯨實驗談(松牧三郎, 1901, 226)
- 諾威式捕鯨實驗談(松牧三郎, 1901, 227)
- 諾威式捕鯨實驗談(松牧三郎, 1901, 228)
- 諾威式捕鯨實驗談(松牧三郎, 1901, 229)

- 諾威式捕鯨實驗談（松牧三郎，1901, 230）  
 朝鮮捕鯨業（朝鮮海通漁組合聯合會調查，1902, 234）  
 朝鮮捕鯨業（朝鮮海通漁組合聯合會調查，1902, 235）  
 日露両国人の韓海捕鯨状況（1904, 260）  
 韓海捕鯨業の状況（1905, 272）  
 韓海捕鯨業の近況（1906, 287）  
 東洋捕鯨株式會社編 1910『本邦の諾威式捕鯨誌』東洋捕鯨株式會社  
 鳥巢京一 1993『西海捕鯨業の研究』九州大学出版会  
 1999『西海捕鯨の史的研究』九州大学出版会  
 森田勝昭 1994『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会  
 1998『『大日本水産會報（告）』における外国船籍捕鯨船及び海獸獵船  
 関連記事－明治15年（1882）から明治26年（1893）まで－』  
 甲南女子大学英文学研究第34号

#### 韓国語文献

- 박 구병 1995 韓半島沿海捕鯨史 圖書出版民族文化 釜山  
 최 길성 1990 日帝時代－漁村의文化変容 亜細亜文化社 서울  
 慶尚南道誌編纂委員會 1963 慶尚南道誌 中

#### 欧文献

- Andrews, Roy Chapman. 1916 *Whale Hunting with Gun and Camera*.  
 Davis, L. E. & Robert E. Gallman 1993 'American Whaling, 1820–1900: Dominance and Decline' In B. L. Basberg ed., *Whaling and History: Perspectives on the Evolution of the Industry*. Sandefjord. Kommandor Chr. Christensens Halfangstmuseum.  
 Tønnessen, N. & A. O. Johnsen 1982 *The History of Modern Whaling*. Berkeley. University of California Press.